



あっさり黙示録

#7 『第6の封印解除～未曾有の天変地異』

黙示録 6章

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。今日はあっさり黙示録7回目です。ようこそいらっしゃいました。先日、システムエンジニアの方（プログラムを作る方）が、こんなことを書いておられました。「我々にとって一番恐ろしいのは、何もしていないのにバグることより、何もしていないのに、そのバグる状態が直ることだ。」

“バグる”とは不具合が生じるということです。何もしていないのに不具合が直る。それを「ああ、別にそれでいいじゃん」で終わらせてしまうと、何もしていないのに またバグる状態が出て来るんです。一度でもバグが出たということは、どこかに原因があるということなんですね。それを、今は解決してるということで、本番で出してしまったらエライ事になります。みずほ銀行の状態になるわけですね。

艱難時代は次から次へと不具合が起こる。次から次へと恐るべき非常事態が起こる。なぜそんな事が起こるのかというと、非常事態が起こる根本原因に向き合わせるためです。祝福の神との断絶状態と、そして悪魔に従って行くことがどんなに酷いことになるのか、その現実を目に見える形で明らかにし、その原因から離れさせるための警告期間でもあるわけですね。

今日解説するのは、7つの封印の中の6番目の封印解除の記事です。6番目の封印は今までの封印とは全く違うんですね。今までの封印はそれぞれの裁きがありましたが、それは基本的に、人間が関与することで起こって行く不具合・事件でした。しかし、6番目の封印解除で起こるのは、人の手の届かないところで起こる天変地異の裁きなんです。

黙示録 6章

- 12 また私は見た。子羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。
- 太陽は毛織の粗布（あらぬの）のように黒くなり、月の全面が血のようになった。
- 13 そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが大風に揺さぶられて、青い実を落とすようであった。
- 14 天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山と島は、かつてあった場所から移された。

今日は第6の封印解除の記事から、3つのポイントで解説します。

- 1) 6番目の裁きの特徴
- 2) それを目の当たりにした人々の反応
- 3) 神と子羊の怒りの日の意味

1) 6番目の裁きの特徴

- 人間が関与できない、人の手が届かないところで起こる天変地異。ここに6つの天変地異が出て来ました。
- ①大きな地震⇒大きなはギリシア語でメガス。巨大。メガトンのメガ。どれくらい大きな地震かという、この時点で人類史上最大です。黙示録には地震が5つ出て来ますが、1発目がこの6章12節です。
  - ②太陽は毛織の粗布のように黒くなり⇒太陽が真っ黒になった。
  - ③月の全面が血のようになった⇒月が真っ赤になった。

地球的規模の大地震が起こると、おそらく大きな町が壊滅状態になり、壊滅した建物から粉塵が出ます。

また、大地震にはたいがい火山活動が伴うものです。火山が噴火すると、それこそ大変な量の粉塵が巻き上げられますね。

ところで、月や太陽の色は何によって決まるのかというと空気中の粉塵です。粉塵の多さや、その微粒子のサイズによって色が変わります。地球規模の大地震によって、地球全体がまるで PM2.5 にすっぽり包まれた、カーテンに包まれたような状態になるのかもしれませんが。その結果、太陽や月の見え方が全く異なるものになってしまうんですね。

④天の星が地上に落ちた⇒地上に隕石が次々落下する。

⑤天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり⇒この天は単数形ですが、もちろん天国のことではありません。宇宙空間を指すと思われます。空間はそもそも目に見えませんね。目に見えないけど空間がある、ということは何によって認識できるか？空間に存在している天体／星を見ることによってです。

つまり、空間がなくなるというのは、空間に今まであった天体が見つからなくなる、見えなくなる。それで、空間が消えてなくなったように見える。そのようにも取れるのではないかと思います。もしそうであるなら、次々隕石落下が起こることの説明がつくんですね。

太陽系の中では、太陽を中心にして惑星が回転しています。その中で質量が1番大きいのは木星。2番目は土星。この2つだけで全体の9割くらい占めるんじゃないですか。この巨大な2つの惑星はほとんど離れず、まるで手を繋いでいるかのように周回している。太陽の周りを回っているんですね。

ここで不思議なことがあって、地球に木星・土星が接近するタイミングは、地球に流星群や隕石群が接近するタイミングと不思議なほどに合致しているんです。

地球に隕石群が近づくと、そのままと激突しますが、地球とは比べものにならない強力な質量を持つ木星と土星が地球に近い場所にいると、重力でそちらに引っ張られてしまう。吸い込まれてしまう。神は、人間が生きて行くために非常にうまく微調整してくださっている。宇宙的スケールで見ても、私たちは生かされている、ということが太陽系の動きを通して分かります。

もし太陽系そのものに異変が起こるとするならば、天の星が地上にボタボタ落ちて来る。

しかも、それは、いちじくが大風に揺さぶられて、青い実を落とすようであった。

青い実はまだ熟していないので、かなりの力を入れないと、もぎ取ることができません。

大きな力が働いて、隕石がボタボタ落下するようなことが起こる。

⑥すべての山と島は、かつてあった場所から移された⇒地球規模で地形が大変化する。

これらが難難時代の初期に起こることです。その時、人々はどんな反応をするのでしょうか。

2) それを目の当たりにした人々の反応

**15 地の王たち、高官たち、千人隊長たち、金持ちたち、力ある者たち、すべての奴隷と自由人が、洞穴と山の岩間に身を隠した。**

地の王たちは10人の王たちです。今世界には208の国がありますが、この時代、世界は10か国だけで、各国に1人ずつ王がいます。すごい権力者、世界に10人しかいない権力者たちが震え上がっている。そして、高官たち、千人隊長たち（軍の高官たち）、金持ちたち（ミリオネア・億万長者たち）、力ある者たち（権力者たち）、すべての奴隷と自由人が震え上がって、洞穴と山の岩間に身を隠した。

大地震直後に、地震で出来た穴に入りたいですか？ 余震があるじゃないですか。大地震の結果できた山の洞穴の中にわざわざ飛び込むような人間で、いますかねえ。ま、いるのかもしれない。書いてあるから。

もしかしたら、これはシェルターのことかもしれません。この時代 万が一に備えて、核退避用で自分たちの身を守るために人工的に作った安全圏、最新式の防空壕のような所に身を隠した可能性があるのではないかと思います。しかし不思議なのは、彼らがそこに入りながら言った言葉です。

**16** **そして、山々や岩に向かって言った。**自分たちを守ってくれるものに向かって言った。  
**「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。」**  
**17** **神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」**

これは非常におかしなことです。彼らは宇宙の現象が変わったこと、地球的な大地震、今まで見たことがない天変地異を見て、だれもがもう震え上がっていて、そして安全圏に逃れながら何と言っているか。  
「なぜこれが起こっているかを、自分たちは認識している。」

この事件が起こっている理由は、**御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。**

つまり、この地震や天変地異は偶然のことではなく、神の怒りの裁きだという認識を持っているのです。

どうして、そんな認識を持つことができたんでしょう？ そうなんだ、ということを宣べ伝えている人たちがいるんです。144,000 人のユダヤ人たちですね。彼らもそのメッセージを聞いてるはずですよ。この問題が起こっているのは、彼らが悔い改めて、キリストを通して神に立ち返るためなんです。

しかし彼らは、「いっそのこと、こんな怖い思いするなら死んでしまいたい！ 山よ、私たちの上に崩れ落ちて、生き埋めにしてくれ！ シェルターよ、破壊されて、私たちをペッシャンコにしてくれ！ そのほうがマシや！」と、身を守るために安全圏に逃げながら、その洞穴と山の岩間に向かって言っているのです。

このような裁きを経験するのは、彼らが悔い改めて、子羊イエス・キリストを通して神に立ち返るためなんです。彼らは「それだったら、死んだほうがマシだ」と言っている。  
意味がお分かりになるでしょうか。彼らが言っているのは「死ぬのは嫌だ。怖い。でも、子羊を信じるのは死ぬよりもっと嫌。」「イエス・キリストを信じるくらいなら、いっそのこと死んだほうがマシ。」  
これはね、非常に頑なな状態になっている。もうガチガチですよ、神に対して。

これは、この時生きている全ての人と言うわけではありません。  
第6の封印が開かれている時、人類は2つのグループに分かれています。

● 前回の解説の通り、「たとえ命を奪われてもキリストを信じます。」「私の罪の償いのために身代わりに死んでくださったキリスト。殉教者になるとしても、どうしてこの方から離れることができるだろう」と、自分の命と引き換えにイエス・キリストを信じる人たち。  
そういう人たちがおびただしく起こされているのがこの時代です。

● 「キリストを信じるくらいなら 死んだほうがマシ」と言う人たち。  
そういう人たちに向かって、神は尚も忍耐をもって待っておられるのです。

3) 神と子羊の怒りの日の意味

**17** **神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」**

神と子羊の御怒りの、大いなる日は艱難時代のこと、その別名です。

というか、聖書の中に“艱難時代”という言葉は登場しません。

分かりやすくするために“艱難時代”と語っていますが、ここでは神と子羊の御怒りの、大いなる日。

日は24時間のことではありません。ここでの日は期間のことで7年間です。

神と子羊の御怒り（裁き）の日だ！これは本当に恐ろしいことです。

子羊とはキリストです。キリストは神の怒りを押し止めるために、神と私たちの中に入って、十字架に掛かって私たちを執り成してくださった方です。執り成すために来られた子羊が御怒りを発揮する時、執り成してくれる者がもはやいないのです。なので、非常に深刻なことなんですね。

ところで、7年間の艱難時代は神と子羊の御怒りの、大いなる日ですが、2022年の今の段階は艱難時代ではありません。今の時代は“恵みの日”と言います。この“日”も24時間ではなくて期間です。今は恵みの期間。恵みの時代。今は恵みの時、今は救いの日です。（第二コリント6章2節）

恵みの時代は、どんな悪人が罪を犯したとしても、裁きは直ちに来ません。その人が悔い改めるのを、神が恵みによって待ってくださる時代です。

悪を行いながら、のうのうと生きている人たちがいるじゃないですか。その人たちに対しても、神はチャンスを与え続けているのです。逆に言うと、善を行っても、すぐに報われるとは見えない時代。

善を行っているのに、悪を行っている者に踏みにじられる事が起こるのはなぜなのか。

悪を行う者に神は恵みを発揮して、悔い改めるのを待ってくださっているからです。

今は恵みの時代です。であるがゆえに、神がいるということが分かりにくい、と怒る人たちがいるんです。

神がいるのなら、なぜ悪人が繁栄し、善人がこんなに踏みにじられているのか?! 恵みの時代だから。

私もかつては酷い男でした。しかし、神の恵みによってキリストを信じることができました。

もし神が恵みの神でないなら、私みたいになんてしようもないのは、とっくの昔に滅んでいました。

この恵みの時代は、人々にとって本当にビッグチャンスの時代なのです。

しかし、艱難時代は恵みの時代ではない。悪は悪として裁かれる時代。なので、艱難時代は殉教者がたくさん起こされますが、殉教に追いやった人たちに対する裁きが次々繰り出されていきます。

最終的な裁きはスタート時点から7年間…ですが、艱難時代もある意味 恵みが残されているんです。

というのは、艱難時代は徹底的に段階的なんです。封印の裁きも1つ目の封印、2つ目の封印、3つ目、4つ目、5つ目、6つ目と段階を経ていますよね。封印7つ、いっぺんにバリッと破いたのではない。

順を追って段階的に少しずつ。なぜそうするんでしょう？段階的に裁くことによって、気付きを与えるためです。今どんなにガチガチに頑なで酷い状態であっても、段階を経て、「これでどうですか。」「これでも悔い改めませんか。」「まだ恵みが残されています。これでもダメですか」と神が語りかけておられるようです。しかし、艱難時代に信じるよりも、恵みの時代に信じるほうがはるかに良いのです。

キリストはあなたを愛して、たった1つしかない命を喜んであなたのために献げてくださった方。

自分の命よりもあなたを大事に思い、あなたを愛して死んで、そしてよみがえってくださった方。

あなたの救い主です。ぜひこのイエス・キリストを信じてください。

次回は続きをお話します。もしよろしければ、チャンネル登録もお願いします。

ではまた このチャンネルでお目にかかりましょう。さよなら！

☆使用した聖書は「聖書 新改訳 2017」です。